

戦後にはじまった民主教育は、経済成長の中で、産業界が求める人材育成機関へと変貌してしまいました。それぞれの時代の中で、学校は、技術開発に寄与できる従順な子どもたちを育て続けてきたのです。そこでは「個人それぞれの能力」こそが問題視され、「学び」はより一層「個別化」されてきました。その一方、そうした流れになじめない子どもたち（不登校・発達障害などと名付けられた子どもたち）は、その個（子）の中に課題があるとされ、レッテルを貼られ、学びの場所さえ切り離されてしまいました。

そもそもの「民主教育」それ自体を問い直したうえで、桜井智恵子先生は「反開発主義」を掲げます。成果や能力が強迫的に求められる社会で、自己責任と競争から逃れる道を、私たちに提示してください。さることでしょう。「ポンコツ」こそがこれからの生き方なのだ、という先生のお話から、様々なことを皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

講師

桜井 智恵子

● 関西学院大学人間福祉研究科教員

専門は教育・社会学・思想史。主な著書「教育は社会をどう変えたのか——個人化がもたらすリベラリズムの暴力」「ポンコツでいい——反開発主義による社会の再生産」



現在の学校教育のあり方を問う

「私たちは『自発的隷従』から逃れられるのか」

2026年2月15日

13:30~17:00 (受付開始13:00)

講演会&パネルディスカッション

会場

富士見文化会館101号室

神奈川県大和市中央5-2-29

小田急江ノ島線・相鉄線「大和駅」徒歩5分

参加費

一般 ● 1,000円

学生 ● 500円 (高校生以下無料)

